

「復興ワードマップ研究会」(第7回) 2018年12月26日

出席者：近藤誠司・宮本匠・木戸崇之・石原凌河・李勇昕・立部知保里

<フリーディスカッション>

- ・分科会で挙がったワード、「被災者」は、英語だったら survivor、victim。このうち、「victim」は亡くなった人も入る言葉だが、「被災者」は亡くなった人は入らない。
- ・犠牲者／被災者／遭難者／生存者という言葉たち。
- ・なぜ、日本のメディアでは、阪神・淡路大震災に関して「行方不明者数」を明示しないのか。「死者数」消防庁の確定報を用いている。他の災害の場合は「死者」と「行方不明者」を明示していることが多い。
- ・2017年九州北部豪雨の時は、福岡県と大分県で「行方不明者数」の出し方が違った。大分県は「安否不明者」を出していた。
- ・災对本部的な見方だと、連絡が取れていないだけの人を「安否不明」、家にいたはずなのにいなくなってしまった人は「行方不明」。「行方不明者」という言葉は、限りなくグレーより黒に近い、生存の見込みが低い状態を指す。
- ・日本の場合、人数を確定できることが前提になっている。人数の確定ができるのは戸籍の情報がしっかりしている日本くらいではないか。「安否不明」の数が正確に分かるというのは逆にすごい。
- ・死者数は災害研究の中で一つのジャンルになっている。ただ、通例は、はじめに犠牲者数を大きく出しておいて支援を集めるというものだと思うが、日本ではそういうことはしない。むしろ日本では、特に報道の場合、最初に出てくる人数が小さすぎる傾向がある。積み上げ方式。どちらの場合にも誤解がある。
- ・英語で「行方不明」は missing。では、「安否不明」は？
- ・これまでの災害では「安否不明」に当たる人、「どこかに避難しているかもしれない」人はカウントしていなかったと思う。
- ・これまでは住民同士で、お互いの「いる」「いない」がはっきり分かっていたので、災害時に「亡くなっている」、「(間違いなく)行方不明」、「ここにいる」ということが分かった。現代の都市では誰がどこに住んでいるか分からなくなっているのに、「安否不明」にカウントされる人が増えているのではないかと。今後も、「安否不明者」の数が増えていこう。報道においても、「安否不明者」の方が、固い数字になってくるのではないかと。

・ある著名な先生の書籍では、新潟中越地震では車中泊をしながら「エコノミークラス症候群」で亡くなった人がいたという記述がある。しかし、実際には、新潟中越地震で「エコノミークラス症候群」を直接的な原因として亡くなった人はいない。メディアが大騒ぎしていただけで、実際に体調を崩して亡くなった方は、肺炎など別の病気が原因だとする論がある。

・『災害情報論入門』の関谷先生のコラムにて、「新潟中越地震でのエコノミークラス症候群に関する報道はワンフレームジャーナリズムの典型」、「報道されたエコノミークラス症候群の50名を分類すると、1名だけ疑い例が残るが、他は関係ない」とされている。「報道がエコノミークラス症候群のことに終始するのは、視野が狭い」という批判。

・車中泊をどこまでしていたかという議論を飛ばして、「エコノミークラス症候群」という数字について論じるのはどうなのか、健闘の余地は残る。

・安直に「車中泊やエコノミークラス症候群について報道しておけばいい」というトレンド・ブームになっていることについては、注視する必要がある。

・台湾では「車中泊」という概念はない。避難するのは学校か、ホテルを無料で提供、公園にテントなど。したがって、エコノミークラス症候群について報道するトレンドも見られない（おそらく、アメリカやイギリスにもないだろう）

・新潟中越地震でも熊本地震でも、余震が怖いから建物の中にいたくないということで車中泊している人が多かった。

・一般の人に対して、どの程度、血栓があるか、対照実験のデータがほしい。本当に「車中泊」が原因なのか分からない。避難生活中のストレスが体に悪いということは自明であろうから、避難所のアメニティを向上させるキャンペーンをすればよいのでは。

・災害看護・医療の分野においてさえも、あたらしい病名をつくりがち。病名ができてドライブがかかって支援が集まるという側面もあるが、実際は、逆に現場を混乱させていることが多い（あたらしい病名にばかり注目してしまう）

・「熱中症」と「凍死」だと、日本においては凍死の方が多い。冬の方が水分を取らないからリスクが高い。しかしながら、熱中症の方が注目されて報道されがち。

・韓国語には「熱中症」という言葉は、まず使われない。イルサビョン＝熱射病。

・知的障害・発達障害の家庭への調査によると、地域（被災地）を離れて避難しない理由は、離れると情報が手に入らなくなるから、行った先でなじめないから、そして、経済的な理由から。したがって、これらの課題をクリアするための支援をおこなえば、広域避難は実現できるともいえる。

・福島から避難している人への復興曲線インタビューによると、仕事・お金の困っているというよりも、避難していることが承認されていないことがつらい。「いつ戻るの？」という発言に傷ついたりする。

・被災地を離れると、同じ被災者から、「お前は逃げるのか」、「一緒に復興に取り組まないのか」、「一緒に我慢すべきだ」という同調圧力がかかる。みなし仮設の人たちの

多くは、「避難していること」を隠している。被災者は、みんながしんどくなっていることが当然（ある程度我慢している状態であることが当然）という前提がある。うまく中間的に「やり過ごした」という事例は、意外に共有されていないのではないか。被災地を離れて、温泉旅館で過ごし、新たな交流をしたことや、思い出をつくったことを、もっとナチュラルに共有してもよいのではないか。避難生活のスタンス、スタイルに関する言葉たちに、ポジティブ・ナチュラルな言葉が少ない。

- 台湾の高雄市小林村の被災の事例。台北市に住んでいる被災者の家族が行政と争い、被災者代表として代弁し闘ったところ「あなたは本当の被災者ではない」と非難された。
- 「被災者」を外部から認定しようとするドライブ。

- **マイノリティ憑依**： マイノリティと呼ばれる人たちの側につけば、発言が正論に聞こえたり、正義の味方に見えたりする。日本の報道はマイノリティ側に立つ報道の仕方をして社会を変えようとしているけれども、無批判・無反省にマイノリティの言うことがすべて正しいと決めつけてしまう危険性もはらんでいる。

- 阪神・淡路大震災の時、神戸のある女性団体が「性的暴力の相談をたくさん受けている」と発表しており、その記事は未だに引用されている。ところが、あるジャーナリストが調査したところ、そのような相談の実態はなかった。**マイノリティ憑依**に陥ったメディアは、それが真実かどうかはどうでもよくて、正義の立場から記事を書いている。

- 本来、マイノリティの側に立って主張するという運動は、どのようにして抑圧された権利を勝ち取るかという話。ただ、社会全体で「自分が承認されていない」という感情をもつ人が増えてくると、「自分だって大変なんだ、承認されていないんだ」という負の感情と結びついてしまう。マイノリティを批判しても支持を得られるという構図も現れてきている。**マイノリティ憑依**に陥ったプロセスがどうだったかということに向き合うのが課題ではないか。

- 被災地支援の局面において、ボランティアを穿って見たり、ボラセンを通さないといけないと言われたり、元々持っている（ポジティブな）エネルギーを引き算するドライブがかかっているのではないか。「みんな大変だ」のトレンド。みんな疲弊している。「だからお前も疲弊しろ、我慢しろ」のトレンド。

- あるシンポジウムにおいて、東北でボランティアをしていた学生がパネルディスカッションで「被災者ってそんなに偉いんでしょうかね」という発言をしていた。マイノリティに共感して何かを変えていきたいという方向に行かず、自分との差異を見出して「自分と被災者は違う」と考え、自分が安住したいという発想かもしれない。

- 最近の講義でボラセンのことを扱っていると、そもそもの前提のところ共有できていない。「どんなに正しい目的があっても、手段が間違っているのは良くないのではないか」と純粹に考えているようだ。ボラセンで「営利はだめ」というルールなのだから、どんなに被災者が大変であっても、だめなものはだめ（手を染めない）という発想。

・大学の講義で私語をしている人がいると、学生同士では注意しないが、コメントペーパーに「おしゃべりしている人を注意するのは教員の仕事だ」ということを書いている。ずるしている人は許せない、頑張っている自分が正当に評価されないのは許せない、という発想か。単位をもらえることがゴールになっているので、少ないコストで単位をもらっている人が許せないようだ。

・災害が起きたら、ある程度は混乱するものなのに、混乱させてはいけないと純粋に考えて「事前にはっきり決めたがる症候群」がある。避難所開設訓練では、参加者から「町外から来た人は追い出せるのか」、「町内会に入っていない人はゼッタイに避難所に入れたくない」という声がある。

・訓練を担っているのは50~60代で、元々会社員や行政職員の人が多い。マネジメント/コントロールすることに慣れている人たちが、そのスキル/テクニックを存分に活かそうとしている。例えばGISを使う、全数調査をするなど。精密・精細に「調べたがる症候群」。これは良い面もあるが、「取り逃さないように、混乱しないように」というマネジメント思考なので、逆に、地域が息苦しくなるかもしれない。いま災害が起きたら、避難所でよく分からないニーズが出てきた場合に、そのニーズはなかったことに（抹殺される、不純なものは無視）されるかもしれない。

・最近の日本社会は、ゼロサムどころかシュリンクサム。努力をしない人が自分と同じ取り分を持って行くことが許せない。フリーライダーを許す余裕がない。ミクロに見れば、町内会は、役員の成り手がおらず、少ない人数で仕事を回している。マクロに見れば、人口減少・少子化。行政は財源に余裕がないので仕事をしなくなる。やったことに見合うサービスがほしい、やってない人にはサービスはない＝市場の考え方になってきている。だから、それを越えたコミュニケーションの取り方が大事だというのが柄谷行人の議論である「**純粋贈与**」。熊本のある避難所では、町内会に入っていない人なども避難所に受け入れたらその後とてもポジティブな連鎖反応が起きた。「**純粋贈与**」を受けた人は何かをお返ししたいという気持ちになる。

・マネジメントをドライブする用語があるということが分科会の議論でも出ていた。マネジメントと同じような物差しとして、コスト/ベネフィットの感覚がある。効率性、無駄を排除する、混乱を許さないような言葉たちが、復興の中にも（たくさん）まざれている、あるいは勢力を強めているのではないか。

(了)